

セガンの関係する組織のポスター発見！

オネジム＝エドゥアール・セガン研究のために

学習院大学 川口幸宏

『セガン 知的障害教育・福祉の源流』（日本図書センター）第4巻に執筆した『セガン・関係年譜（フランス時代）』の底本としたのは Yves Pelicier & Guy Thuillier “Edouard Séguin(1812-1880) l’Instituteur des Idiots” Economica, 1980. Paris. (Y. ペリシエ他『エドゥアール・セガン（1812－1880）「白痴の教師」』)の中の第1部「人と生涯」である。このセガン略伝は東京学芸大学セガン勉強会によって訳出されており、セガンの略伝をフランス語でも日本語でも確かめることができる文献である。私にとってはセガンについて皆無と言っていいほどに知らなかった時に手にした文献という意味で入門書であり、『セガン』に年譜を執筆する時の底本ともなった。もちろん年譜執筆の段階に至ると同書だけで足りるはずもなく、あれこれと文献を漁り年譜を確かなものに創り上げる努力をした。

さて、セガンのフランス時代すなわちその生誕 1812 年からアメリカへ移住した 1850 年頃までの経歴では、不確定な要素が数多くある。「推定断定」という言葉を私は敢えて使っているが、現時点で叶う限りの調査結果を踏まえて執筆されたペリシエ等の前著その他を超えるセガン研究は、2003 年段階では見ることはできない。『セガン』の年譜作成では、ペリシエ等の業績をベースとし、そこで指摘されてはいるが史資料的な裏付けがなされていないことについて、文献・史料等の調査を行うことに集中した。短期の間（2 か月半）にできることは、先行研究の再確認、資料的裏づけ作業でしかなかったからである。しかし、思い知らされたことは、「ペリシエが史料的に確定しないでセガンの経歴を記述しているところは、やはり、史料の確認ができなかったと判断すべきだ。」ということであった。いくつかは一ほんのささやかな数量でしかないが一ペリシエ等が指摘していない史実を発掘することができたが、全体的に見て、やはり、史料的確認が取れないままセガンの経歴の中に入れたものが多い。それらはすべて「推定断定」扱いにし、年譜の中では「・・・か？」「・・・と思われる。」等という慎重を期した表現にしておいた。今後の「セガン研究」の課題の一つは、この「推定断定」に史料を添えて確定することであるし、場合によっては

「推定断定」の訂正を行うことであると思っている。

さて、1843年の暮れにビセートル救済院を罷免されたあとのセガンの活動で明確に記録に残っているのは、聾啞教育の開拓者ペレールの伝記及びセガンの白痴教育の地位を確立した著書の出版などである。そのことからセガンは1846年頃に米国に渡った（移住した、あるいは、亡命した）のではないかという説も出されてきた。しかし、前記ペリシエ等はセガン略伝の中で、「1848年のセガンはどうであったのだろうか？」という書き出しのもと、一枚のポスターが存在することを指摘し、それは1848年2月の革命から第二共和政確立に至る過程で出されたものであること（「1848年3月はじめ」）、そのポスターに、「バルベス、ソブリエ、ピア、トレ=ビルジェ、ヴラベルとともに」セガンが署名していること、それは「共和政の防衛をすべての信頼できる愛国者に訴えるために設置された委員会」（以下、単に「委員会」と表記する。）のポスターであることを述べ、それに続いてポスターの内容が部分引用されている。

ペリシエは史料的裏付けを得てセガンが「委員会」に加わっている（ないしは「委員会」宣言に署名している）としているわけだから、これは「推定断定」ではなく、確定事項という扱いにしてもよい、と思った¹。しかし、この「委員会」の主宰者は誰なのかという疑問に始まり、果たして本当にポスターは存在するのか、という「ゲスの勘ぐり」まで始めてしまった。もちろん、私の手許にあるフランス史関係書（相当詳しいものであっても）には「委員会」の存在に触れているものはない。とりあえず「委員会」の主宰者を調べる作業を進めることにした。

前記の署名者の中の「ピア」は、私の研究フィールド「パリ・コミューン」で登場するフェリックス・ピアと同一人物かもしれないと推測し、彼の経歴を『パリ・コミューン事典』（Bernard Noël, Dictionnaire de la Commune de Paris）と『フランス労働運動人物事典』（le Maitron, Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français, les édition ouvrières）で調べた。ピアが「委員会」に加わったという記述と共に、関係する人物名が多く記載されていた。その中の一人にソブリエがいる。・・・という芋づる式調査によって次第に事実が判明してきた。「委員会」の主宰者はソブリエであることが何よりも大きな事

¹ 後年確認し得たことでは、この事実は19世紀の末のブルヌヴィルによって指摘されている内容とほぼ同じである（BOURNEVILLE, fait au nom de la Commission chargée d'examiner le projet de loi adopté par le Sénat, tendant à la révision de la loi du 30 juin 1838 sur les Aliénés (Urgence déclarée), Annexe au procès-verbal de la séance du 12 Juillet 1889, Maison QUANTIN, 1890. Paris)。つまり、ペリシエらは史料そのものとしてのポスターに基づいてはいないと推認されるのである。

実確認であった²。また、「E. SEGUIN」が「委員会」に加わっていたという記述を『フランス労働運動人物事典』で確かめることができた。ここまでで時間切れとなり、年譜にこの件を記入したが、私は敢えて「・・・か？」と「推定断定」表記にした。というのは、ペリシエが、セガンが「委員会」に加わっていた、とするものの、ソブリエ等と列記していることはたいそう気になったことであった。通常、歴史記述の際には「主宰者誰々の委員会」という表現になるはずだ、という思いがあったわけである、引用されているポスターの文章も中途半端に思われる。全文を紹介しているわけではないだろうと思った。他の文献では「E. SEGUIN」と表記する人物名しか確認できなかったこともこうした思いを強くさせた一つである。SEGUIN という苗字は我らのセガンに固有のものではないし、イニシャルの E だけでは「エドゥアール」と確定できないからである。ひょっとしたら、ペリシエ等は「委員会」のポスターを見ておらず、私が前述したような検索方法によって判明したことを受けて、略伝に書いたのではないか、という思いさえする。なんとしても「委員会」のポスターで確かめなければならない。

2004年9月上旬、パリの LIVRES ANCIENS CHAPTAL という名の古書店からカタログ（古書目録）が届けられた。その中の1点、“Murailles (Les) Révolutionnaires de 1848.”（『城壁 1848年の革命』）という書名のガイドを読むと、政令、共和政公報、ポスターなどを収録したものだ、とある。初版は1851年。カタログに掲載されている版は初版以降発見された史料の追加収録を重ねて、じつに第19版、1868年版だとの案内がある。これだけ改訂増補を繰り返してきているのならば、相当量の史料類が収録されているであろう。ソブリエの「委員会」のポスターもあるかもしれない。カタログの案内をていねいに読むとポスターはカラーだという。つまり、市中に張り出された当時の色を再現している、ということである（すべてをそうしたかどうかは不明であるが）。

読むことは辞書を繰り返して何とかできるようになったけれど、書くこと・聞くこと・話すことができないフランス語能力の現状で、早い者勝ちの世界で「勝利者」になるためには、パリ滞在中には通訳の任をお願いしている K さんのお力を拝借するしかない。さっそく電話をし、念のためにメールで書名を送り、古書店への注文をお願いした。幸いまだ

² “Journées illustrées de la Révolution de 1848(『イラストを添えた1848年革命の日々』)”, aux Bureaux de L'ILLUSTRATION, 1848. Paris. によって革命勃発の日から第二共和政政府誕生までの日々を追っていくと、3月上旬にソブリエが『la Commune de Paris』という新聞を創刊したという記録が見つかった（しかし「委員会」のことは触れられていない）。日本語で言えば『パリ・コミューン』という新聞名となるだろう。大変な発見である。とはいうものの、それはあくまでも私の研究フィールド。これは「副産物」の発見でしかない。

在庫しているとの返事であった。

9月22日、研究室にがっしりと包装された注文本が届けられた。胸を躍らせながらページを繰っていくと、「委員会」のポスターが収録されているのが目に入った！署名者欄を見ると、「エドゥアール・セガン 文学者」とある。間違いのない、我らがセガンである。「委員会」宣言のポスターのコピーと全文訳とを後掲するが、その前に、いくつかの注記が必要である。

一つはポスターが淡いピンク色であることである。1860年代後半に「赤いポスター」が出されている（労働運動、社会主義運動との関係）が、それよりは薄い色。しかし、この淡いピンク色が意味するところは何かを、やはり探し出さなければならないだろう。

二つは1848年2月革命の後「臨時政府」が打ち立てられ、「臨時政府」のもとに国民議会選挙を準備し、執行する期間を「第二共和政期」と呼ぶかどうかの歴史学上の問題に関わることである。つまり、この時点では「第二共和政」を規定する憲法は制定されていない。立憲王政から共和政へと移行することは「宣言」されているけれども、憲法体系から言えばどのように解釈されるのであろうか。この時期にあつて、ポスターには「フランス共和国」と明示されている。

三つは、今日まで続けられていることであるが、「フランス共和国」の題字の次の行には「自由、平等、友愛」のフランス革命期のスローガンが記されていることが通例である。しかし「委員会」のそれは、「自由、平等、友愛、連帯」とされている。「連帯」の文字を付け加えるのが一般化するのとは、とりわけ国際的労働運動の誕生とともにである。国際的労働運動の組織体（第一インターナショナル）が結成されるのは1860年代後半であるから、「委員会」が直接それと関係しているわけではないが、歴史的な文脈上関係していると判断できるのかどうか、という問題が考えられなければならない。

以上の課題を解明していくことを今後の作業課題としておき、何はとまれ、ポスターの全文を以下に紹介しておく。

フランス共和国

自由、平等、友愛、連帯。

共和政の防衛を信頼できる すべての愛国者に訴えるために設立された委員会

不断の警戒、見識ある愛国心、断固とした犠牲的精神、それらは臨時政府を動かす感情であり、それらは共和政が求める感情である。そうした感情を持つが故に、よきすべての市民はなんと臨時政府を援助することか！

1830年の争奪戦の数々の記憶が激しい欲望を蘇らせた。その欲望は緊急に抑制されなければならない。すでに、悪賢い奴らは、大いに妄想あるいは術策をもって、ほとんど受けるに値しないにもかかわらず、任命された。奴らは宗教を利用して政府に取り入った。政府にそのことを明らかにしてやるには、今が絶好の時である。

臨時政府が悪い方へ悪い方へと転がっていくのを阻止するために、数多くの信頼できる市民は、澄み切った心で持ち続けてきた愛国心の助けを求める責を負った委員会を、選出した。献身的な市民は、かつてないほど緊密に同盟を結ぶ必要のあることが、分かるだろう。共和政の救済はそれらの同盟にこそよっているのだから。

このアピールは数多くのパリの愛国者のみでなく、全フランスの愛国者たちに発せられている。政府は、相も変わらず勝利の翌日に出没するこれらの猛禽どもの素性を明らかにしなければならないし、フランスが新しい専制君主制になり続けることから免れるようにしなければならない。これがアピールの内容だ。

市民ソブリエは加盟を受け付けるための代表に選ばれた。ソブリエは、ブランシュ通り25にある警察省の前人民代表である。

委員会は以下の市民で構成されている：

ブランシ、仲買人、プロヴァンス通り5。 ガノウ、工芸人。 イレリイ、校正者。
 ピレ、仲買人。 ブルジェロン、文学者。 フェリックス・ピア、文学者。 ヴラベル、
 同上。 バルベス、同上。 ルシャイエ、保険ブローカー。 ボアヴァン、仲買人。
 カーニュ、同上。 A. ルルウ、文学者。 ドウラオッド、同上。 ソブリエ、地主。
 エドゥアール・セガン、文学者。 ルシエ、仲買人。 トレ、文学者。 リシエ、文学
 者。 ラザン、地主。

次に、幾人かの署名者をピックアップし、彼らの活動の特徴などを紹介しよう。あらゆる史書に登場しない組織であるものの、第2共和政成立過程史にとって重要な意味を

持つと思うのである。バスベスについては特段に記述を要するが、ここでは触れないこととする。

・イレリィ (HUILLERY : HUILERY とも綴る)、「校正職人」、経歴不詳。

「バルベスの人権協会」のメンバー。ジャコバン主義、社会主義を擁護。植字工である労働者経験から普通選挙に立候補、落選。

・カエーニュ (Joseph CAHAIGNE 1796—?) 「文学者」、経歴不詳。

人民の友協会メンバー。王政復古時代にイエズス会に反対する歌を作り収監された。第2帝政に対するレジスタンスで国外逃亡。

・ラザン (Alexandre RAISAN。RASANT とも綴る。1811年頃の生まれ—没年不詳) 「地主」。

家族協会の管理委員会幹事。四季協会のメンバー。常に警察によって監視され、たびたび逮捕、収監が為される。1846年、四季協会から派生した коммуニストの秘密結社の一つの長となる。

・ヴラベル (Achille Tenaille de VAULABELLE 1799-1879)、「文学者」。

1848年7月から10月まで公教育・文化大臣を務めた。歴史教育と現代語教育を重視した教育政策をとった。

・フェリックス・ピア (Felix PYAT、1810—1888)、「文学者」

7月革命に加わる。2月革命で、臨時政府の出身県委員に任ぜられる。続いて国民議会に代議士として選出された。1849年6月13日の蜂起の後国外逃亡を余儀なくされた。山岳派 (モンターニュ派) に属した。1871年の「パリ・コムューン」でメンバーとなる。

・トレ (Théophile THORÉ 1807-1869) 「文学者」

法学校在学中、7月革命に参加。ピエール・ルルーの思想的影響を受け、『ルヴェ・アンシクロペディック』の編集に携わった。1839年に『ラ・デモクラティ』紙編集。共和主義や進歩的な立場にある多くの雑誌などに寄稿した。2月革命の翌日、社会主義オピニオン紙の日刊新聞『真実の共和政』を創刊した。1848年4月の国民議会選挙で立候補、落選。同年9月17日の補欠選挙でセーヌ県から代議士に選ばれた。1849年6月の蜂起で国外逃亡。「芸術の中に自由な思想の、力強く勝利を確信した伝道者」と称された。

なお、この「委員会」に王政権力側から一人の「スパイ」が送り込まれていたことが判明している。その人物の名はドゥラオッド。興味深い史実ではないか。

RÉPUBLIQUE FRANÇAISE.

LIBERTÉ, ÉGALITÉ, FRATERNITÉ, SOLIDARITÉ.

COMMISSION INSTITUÉE

POUR APPELER

A LA DÉFENSE DE LA RÉPUBLIQUE TOUS LES PATRIOTES ÉPROUVÉS.

Une vigilance incessante, un patriotisme éclairé, un dévouement énergique, tels sont les sentiments qui animent le Gouvernement provisoire, tels sont ceux que la République réclame. Que tous les bons citoyens lui viennent donc en aide!

Les souvenirs de la curée de 1830 ont réveillé des appétits qu'il est urgent de modérer. Déjà, les *habiles* ont, à force d'obsessions ou de ruses, obtenu des nominations peu méritées; il est temps d'éclairer le Gouvernement dont ils ont surpris la religion.

Pour arrêter le Gouvernement provisoire sur une pente aussi glissante, un grand nombre de citoyens éprouvés ont nommé une commission chargée de réclamer le concours des patriotes restés purs. Les citoyens dévoués sentiront le besoin de s'unir plus étroitement que jamais, car de leur unité dépend le salut de la République.

Cet appel n'est pas fait seulement aux nombreux patriotes de Paris, mais à ceux de la France entière; il faut que le Gouvernement soit éclairé sur la valeur de ces rapaces qui surgissent invariablement le lendemain d'une victoire, il faut qu'il sauve la France en rendant impossible à jamais une nouvelle tyrannie.

Le citoyen SOBRIER, ex-député du peuple au département de la police, 25, rue Blanche, chez lequel se réunira la commission, a été désigné pour recevoir les adhésions.

La Commission se compose des citoyens:

BLANCHI, négociant, rue de Provence, 5.	GANNEAU, artiste.	HULLERY, correcteur d'imprimerie.
BERGERON, homme de lettres.	PILHES, négociant.	VAULABELLE, id.
BARBÈS, id.	FÉLIX PYAT, homme de lettres.	BOVIN, négociant.
CAHAIGNE, id.	LECHALIER, courtier d'assurances.	A. LEROUX, homme de lettres.
DELAHODDE, id.	SOBRIER, propriétaire.	ÉDOUARD SEGUIN, homme de lettres.
LOUCHET, négociant.	THORÉ, homme de lettres.	
LUCHET, homme de lettres.	RAISAN, propriétaire.	

Boucquin, Imp. de la Préfecture de Police, rue de la Sainte-Chapelle, 5.— Paris 1848.

フランス共和国のシンボル言語「自由、平等、友愛」をめぐる

『城壁 1848年の革命』(第19版、1868. E. PICARD. Paris.)は全2冊。大まかには、第1巻が、1848年2月の革命による臨時政府樹立から同政府のもとで実施された国民議会

選挙まで（1848年4月23日）の政府公報・政令をはじめとし、個人・団体の主張、ジャーナリズムの論説など、第2巻が、同年6月に実施された国民議会補欠選挙（6月4日）を含み、国民議会選挙への立候補・候補者推薦の公報・マニフェストなど、で構成されている。とくに第1巻は日付順に配置されているので、たとえば前記「委員会」ポスターが、たとえ日付を明記していなくても、その年月日を推測することができる。結論を言えば「委員会」のポスターは1848年3月2日に市中に張り出されたようである。「委員会」代表のソブリエが“la Commune de Paris”（『ラ・コミュヌ・ド・パリ』）紙を創刊するのが同3月6日のことであるので、セガンも同紙にコミットした可能性がある。

さて、1848年2月24日に、ディボン、ラマルティエヌ、クレミウ、アラゴ、ルドリュ＝ロラン、ガルニエ＝パジェ、マリによって臨時政府が樹立された。書記局にはアルマン・マラ、ルイ・ブラン、F. フロコン、ウベル（書記長）が入っている。政府樹立を宣言した「フランス人民の名において(Au nom du peuple français)」をトップ見出しとした「フランス人民への臨時政府の宣言」（2月24日付）で、「臨時政府は共和政(la République)を望み」、その「原理」を「自由、平等、および友愛」とする、とした。政府公報のトップ見出しが「フランス共和国」に統一されるには、時間的にはさほど遅いわけではないが、いくつかの公報を出しての後のことになる。また「フランス共和国」の次の行に「自由、平等、友愛」を明記するにもさらに数号の公報を必要としている。なお、臨時政府に先駆けてパリ市長（ガルニエ・パジェ）名で出された公報（2月25日付）が「フランス共和国」と「自由、平等、友愛」とをセットにしているのが注目される。

さらに、臨時政府は、2月26日付公報（「フランス共和国」「自由、平等、友愛」の2行見出し）で、「国旗は三色旗である(le drapeau est le drapeau tricolore)」と布告した。「三色旗は、フランス共和国、自由、平等、友愛という言葉を書き表したものである。自由、平等、友愛の三つの言葉は民主主義の教義をもっとも広義に説明したものであり、三色旗はその象徴であり、同時にそれぞれの色はそれぞれの伝統を引き継ぐものである。」という。同時に、同布告は、政府関係者が赤いリボンを着用すること、旗竿にも赤いリボンを結びつけることを宣言している。三色が「青、赤および白」であることを周知させたのは2月27日の警察部局長公報である。

48年革命によってフランスが共和政へと進むことは、おおよそ公知されていたと見ることができる。だが、その共和政をどのような性格の政体にするのかをめぐって、臨時政府は「自由、平等、友愛」をシンボル言語と定めたが、その他、個人・組織から、さまざま

なシンボル言語が出されていたことは注目に値しよう。

まず、臨時政府樹立の前日、すなわち、2月23日に、「パリ市民（へ）」というポスターが出されている。これは、オディロン・バロ、A. ティエールの名で出されたものであるが、彼ら自身の入閣を訴えるものであった。ティエールはフランス近代史ではきわめて重要な役割を果たす人物であるが、ここでは、紙幅の関係もあり省略する。彼らが掲げたシンボル言語は「自由、秩序、改革」である。それはポスターの末尾に強調されている。

翌24日には「フランス共和国」の見出しのもと「計画—人民へ」とのタイトルのポスター（黄色）が出されている。「人民の声は神の声である」と見出しの下に小さく印字され、タイトルの下には、次のように、やはり小さな印字スタイルで書かれている。

「自由、平等、友愛。

人民の連帯。

兄弟同様に愛しあおう。」

「連帯(Solidarité)」が「自由、平等、友愛」とは別のシンボル言語として登場している。このポスターは、労働権、普通選挙権、平等・無償・義務の公教育などを訴えている。末尾に GARDONS の署名がある。なお、これとほぼ同様の柱で構成されたポスターが26日にソブリエ（前記「委員会」の主宰者）によってなされている。とりわけ、公教育要求として「無償・義務」の主張は多く見られるが、「平等」主張はめずらしい。25日には『ラ・フラタナティ』紙が「マニフェスト」を広告しているが、タイトルの下に「自由、平等、友愛、統一(unité)」と示している。「自由、平等、友愛」のほかに「統一」が加えられている最初のポスターである。『ラ・フラタナティ』紙の「マニフェスト」には、選挙によって選ばれた市民参加の陪審員制度の確立、普通選挙制の確立（市町村による選挙管理）、国立作業所の早期開設、義務・無償の公教育などが示されている。なお、「自由、平等、友愛、統一」のシンボル言語を「フランス共和国」の見出しの下に添えたのはソブリエが最初である(2月26日)。ソブリエはまた、「連帯」の言語を使用していることは、前記した通りである。

一方、「人間性(humanité)」を付加する立場も見られる。これは、2月28日付のポスター「共和主義的カトリック教徒へ／政治学」とのタイトルで出されているものであり、「自由、平等、友愛」は、12世紀以来の教会の教義とモラルとを示したものであり、それらは「人間性」の普遍的な秩序を示すものである、とする。3月1日には「フランス教会」が「マニフェスト」を発表しているが、「自由、平等、友愛」を「人間的生活(la vie humaine)」

と規定し、「人間性」の重要性を訴えている。なお、宗教者・教会等は「宗教の自由」を強く主張しているが、これは人々の「信教の自由」と区別されるべき概念であり、事実、「宗教の自由」の名の下に、その後のフランス史で、長く宗教者・教会が公教育を名実共に牛耳るという事態を生じさせた。

以上見てきたことを整理すれば、「フランス共和国」はフランス革命期に誕生した「自由、平等、友愛」をシンボル言語として継承することでほぼ統一されていくが、その過程で、そしてその後のフランス近代史の中で、その「共和政」の性格づけをめぐるシンボル言語が登場する。「秩序」「改革」「人間性」「家族」「宗教」などはその後保守派が好んで用いる言葉であるし、「連帯」「統一」は、主として、労働運動を媒介・媒体とする立場から提出される。そしてこれらは、間違いなく、第二共和政下における「対立」となり、また、その後のフランス近代史におけるさまざまな政治運動上の「対立」となる。

エドゥアール・セガンが「自由、平等、友愛、連帯」の象徴言語のもとに第二共和政樹立のために市民運動に加わったことは、明記されるべきことであろう。